

『ボヴァリー夫人』におけるジュスタンの役割について

大橋 絵理

長崎大学言語教育研究センター

Role of Justin in *Madame Bovary*

Eri OHASHI

Center for Language Studies, Nagasaki University

Abstract

This article addresses an issue in the manuscripts analysis of the role of a servant, Justin, in *Madame Bovary* of Flaubert. He has been considered as a character of minor importance. However, his name often arises in the episodes which determine Emma's fate, from the very beginning of the manuscripts of this book. For example, Emma first realizes the contempt she feels toward her husband when she notices he always carries his knife like a peasant, and mutual love with Leon also originates with Justin's intervention. Rodolphe, looking at Emma nursing Justin who has fainted, decides to tempt her, and he becomes her first lover. This paper provides a consideration to the role of Justin as intermediary who finally leads Emma to her bankruptcy and to her suicide.

Key Words: Flaubert, *Madame Bovary*, manuscripts, Justin

1. はじめに

『まごころ』の主人公は女中フェリシテであり、『ボヴァリー夫人』の中の女中フェリシテはエンマと密接な関係を持つなど、フローベールの作品において女性使用人が重要な役割を果たしていることは知られている¹。だが男性使用人の役割にかんしては、まだ十分な分析がなされているとは言えないだろう。『ボヴァリー夫人』にお

ける男性使用人達を見た場合、最も多く登場するのは薬局の見習いの少年ジュスタンである。彼は基本的にオメー家の雑用の仕事をしているだけで、特別なエピソードを担っている登場人物ではない。ただ彼はエンマに密かに憧れており、シャルルとともにエンマの死を心の底から悼む人物として描かれている²。ジュスタンの人物像に関して、クロディーヌ・ゴット＝メルシュは、エンマの輝く黒髪にたじろぐジュスタンによって、エンマの魔女的であると同時に「宿命の女」としての側面が示唆されていると指摘している³。また、マーク・ジラルはジュスタンがオメーの人物像を明確にする役割を果たしていると分析する⁴。このようにジュスタンは他の主要人物像を際立たせるための補佐的な役割を担っていると一般的に考えられてきた。

しかし、『ボヴァリー夫人』の「プランとシナリオ」を見ていくと、その初期段階から彼が登場していることに気づく。例えば ms gg 9, f° 15 では « Emma & Léon causent ensemble. - le petit Justin vient à plusieurs reprises chercher homais »⁵ とエンマやオメー、彼女の愛人の一人となるレオンとともに名前が記されており、その他の多くのプランにも彼の名が見られるのである。本稿では草稿を通してエンマの恋愛の始まりに関するジュスタンの役割を検討し、ジュスタンの人物像を再考したい。

2. エンマとレオン

まずジュスタンが初めて物語へ登場する場面の草稿をたどっていこう。Ms gg 223², f° 91 でジュスタンは、« les petits Homais, 4 enfants, sales & gâtés: les jouait/er & les menait au jardin, fonction qu'il partageait avec Justin. C'était un petit cousin de Mr H. 14 ans, à la fois domestique & aide - pharmacie. il servit dans les premiers temps à l'installation Homais l'envoya »⁶ とボヴァリー一家の内部に最初から入り込む人物として設定され⁷、オメーの子供たちの世話をする使用人及び薬局の見習いという立場となっている。次の ms gg 223², f° 90 では f° 91 よりもジュスタンの歳は1歳年下の13歳となり、同時にオメーの4人の子供たちの年齢も最初は「4歳から8歳」次いで「9歳」と書かれたが抹消され、最終的には「5歳から10歳」に落ち着いている。その後 ms gg 223², f° 99 v で余白にオメーの4人の子供たちは5歳から10歳と記されるが、ms gg 223², f° 167 v では、子供たちの年齢はもはや示されず、ジュスタンの年齢の14歳も抹消され、それ以降最終稿でも両者の年齢が書かれることはない。しかし、草稿が進むにつれジュスタンの年齢がオメーの子供達に徐々に近づいたということから、フローベールは子守をしつつ仕事をするジュスタンを子供と大人の過渡期的存在として設定しようとしていたと考えられる。つまり、ジュスタンは子供がまだ手にしない可能性と大人がすでに失ったものを所有している人物とも言える。そしてこのようなジュスタンは、エンマの運命が決定的に転換する重要な恋愛の場面に必ず居合わせるのである。

それでは、まずエンマとレオンの場合を見てみよう。最初、エンマは「レオンを愛しているのかどうか考えようとしなかった。[...] エンマは樋がつまっている時には、家の平屋根の上で雨水が海になることを知らなかった。だから彼女は事がなければそのまま安心しきっていたかもしれなかった。が、突然エンマは壁に亀裂を発見するのである⁸。そのきっかけとなったのは、ボヴァリー夫妻、レオン、オマーと子供達、ジュスタンが製麻工場を見学に行った日の出来事であった。この挿話は「プランとシナリオ」ms gg 9, f° 21 で« *épisode des sœques. - hiver, neige, Justin porte les parapluies - haine de Charles. - mouvement de joie* » と書かれ⁹、草稿では ms gg 223², f° 188 に初めて描かれる。オマーの子供ナポレオンが石灰を積み上げている中に飛び込んだ後、子供の靴から石灰をなかなか落とせないジュスタンは次のように言う。« - si j'avais un couteau pr râcler dit Justin, ce sera plus commode. Charles proposa le sien *allons se-dit Em. Intérieurement - allons, bon!* il a couteau dans sa poche *maintenant* comme un paysan. *pensa-t-elle* ». フローベールは、余白にジュスタンの言葉を「間接話法に」と記している。この些細とも思えるエピソードは、ほぼ同様の文章で ms gg 223², f° 187, f° 186, f° 185, f° 207 と数枚にわたって書かれている。ただし、f° 187 から、ジュスタンの台詞は直接話法ではなくなり、それによってエンマの直接話法の独白が強調されるようになる。そして最終稿では « *Napoléon se prit à pousser des hurlements, tandis que Justin lui essuyait ses chaussures avec un torchis de paille. Mais il eût fallu un couteau ; Charles offrit le sien. - Ah ! se dit-elle, il porte un couteau dans sa poche, comme un paysan !* »¹⁰ と描かれる。この場面の直前にエンマはシャルルとレオンの外観を比較するが、そこではエンマのシャルルへの憎しみというような直接的な感情は語られていない。エンマがシャルルへの嫌悪感を言葉ではっきり自覚するのは、彼女が知的で紳士的だと考えているレオンとの比較ではなく、いつもしかれてばかりいる使用人の少年ジュスタンとの比較によってなのである。ジュスタンでさえ持っていないナイフをシャルルが持っていたことによってシャルルの価値の低さが露呈するのだ¹¹。

それに伴い、この日の夜シャルルが隣人オマーの家に行ったあと、エンマは一人家に残りプラン ms gg 9, f° 21 に« *mouvement de joie* » とあったようにレオンに対する思慕及びレオンのエンマに対する恋心を確信する。« *elle [Emma] répétait, en avançant ses lèvres comme pour un baiser : - Oui, charmant ! charmant !... N'aime-t-il pas ? se demanda-t-elle. Qui donc ?... mais c'est moi ! Toutes les preuves à la fois s'en étalèrent, son cœur bondit* »¹²。製麻工場見学以前は、エンマは修道院で少女時代に読んだ小説の中のロマンティックな恋愛に憧憬を抱くばかりであったが、ジュスタンの介入によって夫への憎しみ及びレオンとの相思相愛を自覚し、このエピソードを転換期として現実の恋愛へと踏み込んでいくことになる。

3. ボヴァリー家でのジュスタン

レオンとの恋愛は、彼がヨンヴィル・ラベイの村を去ることで実現がいったん遠のくが、その後エンマはロドルフと恋愛関係に陥る。ロドルフは瀉血してほしいという自分の下男を伴ってシャルルを最初に訪ねて来た時、フェリシテと話していたジュスタンをボヴァリー家の使用人だと思い込み、シャルルに用件を伝えてくれるように頼む。

L'élève en pharmacie
~~Justin~~ qui était toujours prêt à faire
des
 toute autre besogne que la sienne - & qui e Me
 où il y était devenu B. vingt fois le jour trouvait rôdant dans
 un espèce de domestique son escalier, tant il semblait affectionner sa
 libre s'empressa
 maison se dépêcha d'enjamber par-dessus les
 où ils prenaient B
~~B. assis à~~ la fraîche et dans le corridor
 paysans, [...] et alla trouver Charles

(ms gg 223³, f° 37)

ロドルフがジュスタンをボヴァリー家の使用人と取り違えたということは、ジュスタンがいかにボヴァリー家になじんでいたかを示している。実際エンマに憧れを抱いているジュスタンは本来の雇い主である薬剤師の用事よりボヴァリー家の用事を優先させているのであり、2階にいるエンマと少しでも接触を持ちたいために階段を1日に20回もうろつくのだ。ここで、「ジュスタン」という名前が抹消され、「薬剤師の見習い」と書かれるのは、彼が別の家に属していることを強調するためであろう。それと同時に書かれた余白の「一種の予備の使用人」という言葉はボヴァリー家でもジュスタンを自分達の使用人の一人とさえ考えていること示し、ジュスタンが両家に属した特異な人物であることが暗示されていると考えられる。

さて、次の ms gg 223³, f° 38 は f° 37 とほぼ同様の記述となるが、ms gg 223³, f° 39 では彼が予備の使用人でボヴァリー家をうろついているという説明は削除され、ms gg 223², f° 309 v になると患者にかんする情報も削られ描写は単純化される。その後もこの文章は、ms gg 223³, f° 36、ms gg 223², f° 222 v, f° 254 では抹消されながらも残っていくが、結局最終稿では次のように書かれる。

- Puis-je voir Monsieur ? demanda-t-il à Justin, qui causait sur le seuil avec Félicité.

Et, le prenant pour le domestique de la maison :

- Dites-lui que M. Rodolphe Boulanger de la Huchette est là.

Ce n'était point par vanité territoriale que le nouvel arrivant avait ajouté à son nom la particule, mais afin de se faire mieux connaître. [...]

Charles entra dans la salle. ¹³

ここでは Ms gg 221, f° 254 まで書かれていた「薬剤師の見習い」という仕事の説明も削除され、ジュスタンは名前が記されるだけになる。そのかわりに、シャルルが部屋に入ってくる文章の前に付加されたのは、ms gg 223³, f° 37 でジュスタンの描写の後とシャルルの登場の前、ms gg 223³, f° 40、f° 39、ms gg 223², f° 309 v、ms gg 223³, f° 36、ms gg 223³, f° 222 v、ms gg 221, f° 254 ではシャルルの登場後に書かれていたロドルフの社会的立場の説明である。理由としては、この場面の直後がロドルフとエンマの最初の出会いになることから、フローベールがジュスタンよりもロドルフに焦点をあわせることを決断したからだと考えられる。しかし、作者が草稿の最終段階までジュスタンに関する記述を残したということは、ロドルフがエンマに出会うためにはジュスタンを通さなくてはいけないという考えを保ち続けたということの証左であろう。ロドルフがボヴァリー家に入るには、まずジュスタンを介さなければならぬのである。

4. エンマとロドルフの出会い

ロドルフのボヴァリー家への到着の場面ではジュスタンに関する記述は最小限に抑えられたが、再度ジュスタンは別の場面で登場する。プランの段階からその場面は「~~Rodolphe chez Mr Bovary. petite scène — Justin — saignée. Justin se trouve mal. Emma le soigne — charmant soleil Emma jette la cuvette pleine de sang~~」(ms gg 9, f° 23) と記され、ms gg 223³, f° 40 では次のように描かれる。

ne lui donna pas le temps

*et monta vite dans
la ch. de Mde prendre
ce qu'il fallait*

Mais Justin qui ne demandait pas mieux que
de faire toute autre besogne que la sienne se précipita dans
il fut qqe temps car

l'escalier chercher cela. - on entendit même Emma qui
disait. « eh bien, qu'es-tu que tu attends donc ? →
descends » & ~~il reparut tenant les deux objets.~~

シャルルはフェリシテに瀉血の準備のために、エンマの部屋に行って盥と包帯を取ってくるようにいつけたが、すぐさまジュスタンがその道具を探すために階段を登る。ここで興味深いのは « Justin qui ne demandait pas mieux que de faire toute autre besogne que la sienne » という文章が、ms gg 223³, f° 37 でロドルフがジュスタンにシャルルを呼んできてほしいと頼んだ時の文章とほぼ同じ点である。フローベールが状況の異なる場面に類似の文章を挿入したのは、ジュスタンのエンマへの憧れの強さを示唆するためだと考えられる。それは次の場面で、« il y resta qqe ~~peu~~ temps, on entendit ~~même~~ une voix de femme ~~qui répétait/er~~ « descends donc ? que te manque-t-il ? » (ms gg 223², f° 308 v) と、エンマのそばに少しでも長くとどまろうとして、なかなか階下に降りようとしないうジュスタンの態度の描写からも明白であろう。一方 ms gg 223³, f° 40 から ms gg 223³, 222 v に至るまで何度も繰り返されるエンマのジュスタンに対する« que tu attends donc ? » という言葉は、彼女の方はジュスタンの純粋な恋心に一切気付いておらず、単なる使用人として邪険に扱っていることを示している。

また、f° 40 と ms gg 223³, f° 42 では、階上から聞こえてくるのは「エンマ」の声だと書かれ彼女の存在が前面に押し出されているが、ms gg 223², f° 308 v や ms gg 223³, f° 36 になると、「女性の声」とだけ記され、エンマという名前が消える。さらに、ms gg 223³, 222 v になると「女性」という言葉も消えて「声」だけが聞こえるようになり、ms gg 221, f° 254 では、シャルルが医療道具を持ってきてくれと頼む相手は« ~~alors Mr Bovary commanda à la cuisinière d'apporter une bande et une cuvette~~ » とフェリシテではなく、名前のない「料理女」にかわり、「エンマの寝室」という道具がある場所、誰がどのようにそれらを取りにいったか、階上の女性の声といった記述がすべて消去される。この状況にいる人物でエンマの名前及び人物を知らないのはロドルフだけであることから、フローベールがエンマの存在を消したのは、ロドルフの視点にさらにあわせたからだと推測される¹⁴。それと同時にジュスタンの行動も削除され、コピー原稿 ms gg 222, f° 206 や最終稿では、次のようになる。「Et, le [Justin] prenant pour le domestique de la maison : - Dites-lui que M. Rodolphe Boulanger de la Huchette est là. [...] Bovary commanda donc d'apporter une bande et une cuvette, et pria Justin de la soutenir »¹⁵。

しかし、これに続くエンマが登場する場面でジュスタンは重要な役割を果たすことになる。シャルルから血を受けとめる盥を持つように言われ、それに従ったジュスタンであったが、血を見て気を失ってしまう。ジュスタンのこの気絶がきっかけとなって、シャルルは二階にいるエンマを呼び、はじめてエンマはロドルフの前に姿を現すことになる。それを考慮に入れると草稿から最終稿までフローベールは二人の出会いに何度も異なった場面でジュスタンを介入させようとしていたことがわかる。

さて、ms gg 223³, f° 43 では、最初は « on » と特定されていない人物が気を失ったジュスタンをテーブルに座らせるが¹⁶、すぐに « on » は抹消され彼を座らせたのはロドルフに書き換えられる。

ma femme cria
Ch. embarrassé
- ma femme ! ~~cria Charles embarrassé~~ - elle descendit
« du vinaigre ! - ah mon dieu ! deux à la fois
« ~~du vinaigre,~~ » ~~cria-t-il~~
Tranquille
- ce n'est rien disait Mr Rodolphe. ~~voilà mon homme~~
prenant Justin dans ses bras
le
~~qui revient~~, tandis que il posait Justin sur la
tranquillement
table

ここでフローベールはシャルルに対して二回 « embarrassé » を、ロドルフに対しては « tranquille » と « tranquillement » という言葉を使用しているが、それはシャルルの混乱ぶりとロドルフの冷静さを際立たせようという意図があったからだと考えられる。さらに行間に挿入された « *prenant Justin dans ses bras* » という表現は、エンマにロドルフの男性としての力強い肉体の魅力を見せるためだと言えるだろう。その後、ms gg 223³, f° 44 ではこの表現が本文に取り込まれ、« tranquillement » という言葉も本文に 2 度挿入される。« Mr Boulanger tranquillement tout en prenant Justin dans ses bras ~~qu'il posait/a tranquillement~~, sur la table ». そしてシャルルに対しては« dans l'émotion de tant d'embarras il avait du mal à mettre la compresse » とさらに無能ぶりが付け加えられ、これらの文章は最終稿までほとんど変化することはない¹⁷。

それではエンマはどのようにジュスタンを介抱するのであろうか。フローベールはこの場面をプラン ms gg 9, f° 27 で、« Emma décrivait Justin. - vinaigres sur les temp[es] ~~Rodolphe chez Mr Bovary. petite scène — Justin — saignée. Justin se trouve mal. Emma le soigne — charmante soleil Emma jette la cuvette pleine de sang~~ » と記し、エンマがジュスタンのネクタイを解く動作をロドルフの前での最初の行為と設定している。そして草稿 ms gg 223³, f° 50 では、エンマが f° 27 と同様の行為をしたあと¹⁸、« il [Justin] sourit, en prenant une g^{de} respiration » という文章が付加されている。それはあたかもエンマにネクタイをはずされ、身体を触れられたジュスタンが快樂を得たかのようである。さらに、ms gg 223³, f° 48 では、エンマの行動が詳細に語られる。

se mit à lui défaire retirer *il y avait un noeud*
elle défit sa cravatte. et comme les rub cordons
aux cordons *eut du mal à pouvoir*
de sa chemise ee étaient nouées, elle e/ fut du mal qqes temps
d'ouvrir le col
avant d'en venir à bout. ses doigts l'(étranger) regardait /
elle insinuait légers
l/ses doigts de femme qui s'insinuaient avec impatience dans
elle *Puis Puis ensuite*
dans le cou + blanc / du jeune garçon

minutes
resta qqe peu
elle fut qq temps à
remuer

フローベールはエンマがいかに苦勞してジュスタンのシャツの紐の結び目を解いたかを繰り返し書き留めている。またここではエンマやジュスタンという固有名は使用されず、「*jeune garçon*」、「*femme*」という匿名の人物同士の行為として描かれており、それを「見ていた *regardait*」のは「*l'étranger*」＝ロドルフとなっている。二人を全く知らない「*l'étranger*」にとって、若い男性のネクタイを外し、その指で彼の「*le cou blanc*」をもどかしげにまさぐる魅力的な女性が、非常にセクシャルなイメージを想起させるのは明白である。さらに彼女は酢を付けたハンカチで男性のこめかみを軽くたたきただけでなく、頬を膨らませ、そっと濡れた場所に息を吹きかけるが、その姿は見るものに皮膚感覚を呼び起こす。

この場面は最終稿では、次のように描かれる。

Madame Bovary se mit à lui retirer sa cravate. Il y avait un nœud aux cordons de la chemise ; elle resta quelques minutes à remuer ses doigts légers dans le cou du jeune garçon ; ensuite elle versa du vinaigre sur son mouchoir de batiste ; elle lui en mouillait les tempes à petits coups et elle soufflait dessus, délicatement.¹⁹

F° 48 と比較すると、「*le cou blanc*」というジュスタンの具体的な身体の様子やエンマの指の動きをみつめる「*l'étranger*」という言葉が省略されることでエロティシズムは緩和されている。しかし、やはりジュスタンの役割は揺らぐことはない。この場面で彼が必要な理由のひとつは 2 つ考えられる。ひとつは血を見て気を失うような経験の少ない若い男性と彼を落ち着いて介抱するエンマの姿の対比こそが、彼女の成熟した女性としての魅力を十分に引き出すことになるからである。もうひとつは、自分に恋しているジュスタンを介抱する彼女の姿は、その後彼女と恋愛関係におちいるロドルフとエンマの姿を暗示させるからだと思われる。実際ロドルフが彼女を誘惑することを決意するのは、このボヴァリー家への訪問の帰り道なのだ。エンマに惹かれその後ボヴァリー家に通うことになるロドルフの姿は、ジュスタンの姿とも重なり合うのである。

また、プラン ms gg 9, f° 23 で « ~~eharmaent~~ soleil Emma jette la cuvette pleine de sang » と書かれていたことを思い起こそう。草稿 ms gg 223³, f° 50 でその部分は詳しく描かれる。

~~D'une main Emma prit la cuvette~~
le noircissant

elle était sur la - soleil frappait dessus - & y faisait, comme une
table ———— *disque*

plaque de cuivre rouge, oscillant entre les parois de la
Emma la prit ouvrit la fenêtre
porcelaine, & de l'autre, tournant l'espagnolette
~~de la fenêtre, qu'elle ouvrit & versa dans le~~
- nappe rouge que traverse le soleil - comme un
~~jardin sur un rosier~~ lambeau de pourpre au vent.

盥の中にあるのは、ロドルフが連れてきた農夫の瀉血した血である。エンマは、農夫やジュスタンという男性達が見て気絶するような大量の血におびえることなくそれを平然と窓の外に捨てる。ここでは、彼女の毅然とした美しさと血というグロテスクさが合致し、それがエンマに特異な「魅力」を与えている。ジャン＝ピエール・リシャールが指摘したようにフローベールの書簡や小説の中で液体はセクシャリテと非常に強く結びついている²⁰。さらにエンマが片手で陶器の盥を持ちもう一方の手で自ら窓を開け、血を外に投げ捨てるというしぐさは、家庭に縛られた状態の身体を外に解放したいという象徴ともなっていると言えるだろう。戸外という開かれた空間でバラに注がれる赤い液体は、日の光に輝くだけでなく風に吹かれて散っていくというように風景と溶け合っているように見える。それはエンマがロドルフと初めて関係をもつ森の中の情景を想起させる。« le soleil horizontal, passant entre les branches, lui éblouissait les yeux. Ça et là, tout autour d'elle, dans les feuilles ou par terre, des taches lumineuses tremblaient, [...] elle sentait [...] le sang circuler dans sa chair comme un fleuve de lait »²¹。この木立に囲まれた場所にも「太陽」は現れ、エンマの目を眩ませる。そして木漏れ日の中でロドルフに抱かれたエンマの「血」はミルクの流れのように自由に肉体を駆け巡るのだ。「ミルク」という言葉は、エンマから介抱されていた時のジュスタンの目が « des fleurs bleues dans du lait » のようであったという比喩とも通じるであろう。これらの二つの場面には、植物、太陽の光、血、ミルクというようにほぼ同じ語が見出されるのである。

さて、次の ms gg 223³, f° 49 になると、フローベールはエンマがテーブルの上にあった盥を取るという行為の余白に « la met sous la table - juppe qui bouffe » と書き留める。その後 ms gg 223³, f° 48 では、それまで « rouge » や « poupre » という鮮明

な血の色が « rose » へと淡く変化し、血の印象が薄れていくのと同時に余白にメモされたエンマの服装の描写が本文に取り込まれる。そして ms gg 223³, f° 55 になると、エンマはテーブルの上の盥を取って窓の外に血を捨てるのではなく、反対に血の入った盥をテーブルの下に置くようになり、「*c'était une robe d'été à quatre volants de couleur jaune, longue de taille, et large ample de tour – donc [...] quand elle se releva courant d'air - & la poussière des pavés sur les guêtres de l'étranger*» と余白にはエンマのドレスがさらに詳しく記される。エンマの装いは「夏のドレス」で軽やかさが、「長く」「ゆったりした」という言葉で非常に女性的なイメージが喚起されるようになっていく。さらに「黄色」はロドルフがボヴァリー家に到着した時に「黄色」の手袋をつけていたことから、将来の彼らの親密さがこの色の一致に表現されているとも推測できるだろう。また、本文には « *qu'elle fit en se baissant par terre sa robe d'été bouffa. dôme léger dont elle semblait sortir - comme la moitié d'un globe tremblant - sa taill- et ses bras. - ses épaules à la hauteur des genoux de Mr Boulanger* » と記される。膨らんだ半円のドレスから出現しているように見えるエンマの姿は泡から生まれたアフロディーテを想起させる。そして「彼女の肩がブランジェ氏の膝の高さにある」という文章から、ロドルフが盥を置くためにかがみ込んでいる彼女の身体、腕や肩を上からのぞき込んでいる状態であることが示唆されている。その後 ms gg 223², f° 273 v で、エンマの衣装は次のような状態になる。

<p>chancelait un peu écartement en allongeant les bras le gonflement de place en place</p>	<p>comme Emma par terre, remuait sur agitait les bras le gonflement ses talons, les/a plis bouffissure de l'étoffe mince eà & là eà & là se crevait, en plis longs selon les inflexions de son [...] corsage. Quand elle se releva d'un mouvement Puis tout à coup brusque, la poussière on sentit un courant d'air souffla et la poussière soulevée alla tomber sur les guêtres de l'étranger fraîche brusque une bouffée tout à coup parut haleine tout à coup une bouffée rapide s'échappa de son vêtement, et souffla même de la poussière sur les guêtres de l'étranger.</p>
--	---

ロドルフからのぞき込まれていたエンマの肌にぴったり張り付いた細身の胴着は彼女が腕を広げた瞬間に胸のふくらみにそって綻びる。Ms gg 223³, f° 55 の余白で彼女が再び立ち上がった時に « *la poussière des pavés sur les guêtres de l'étranger* » と書かれていたが、フローベールの作品ではしばしば「埃」が恋愛、特に男性側の打算による恋愛の場面に出現する²²。この草稿では f° 55 にあった余白の文章が本文に取りこまれ、「埃」がロドルフのゲートルの上に落ちるとい文章が 3 回も記される。彼女の身体を直接的に感じさせる綻んだドレスからの「さわやかな *fraîche*」そよぎは、エンマの香りを含むとも推測されるだろう。エンマの身体の香りが、埃を舞い上がらせロドルフのゲートルにそれを落とすのだ。埃はエンマとロドルフとの戯れとも見て取れ、彼らの今後の関係が無言のうちに暗示されているとも言える。さらに ms gg 223³, f° 55、ms gg 223², f° 273 v, f° 243 v でのエンマのドレスを形容する « *dôme* » や « *globe* » という言葉は天空のイメージと結びつく。4 段の襷は太陽の光線のようにも感じられ、屈むことによって黄色いドレスが身体の周りに広がる様子はエンマが光に包まれて輝いているようにも見える。このような「光」と「埃」の中に存在するエンマは、聖性と男性を誘惑する娼婦という 2 面性を備えていると考えられる。

だが、ms gg 221, f° 256 になると、とエンマのドレスと天空との直接的な暗示は消され、裾が彼女の周りに広がったという表現だけに抑えられる。エンマの服からの空気のそよぎ、およびそのそよぎでロドルフのゲートルへと埃が飛んだという文章も抹消され、ms gg 222, f° 208 では完全に削除される。そして最終稿では次のように描かれるようになる。

Madame Bovary prit la cuvette. Pour la mettre sous la table, dans le mouvement qu'elle fit en s'inclinant, sa robe (c'était une robe d'été à quatre volants, de couleur jaune, longue de taille, large de jupe), sa robe s'évasa autour d'elle sur les carreaux de la salle ; - et, comme Emma, baissée, chancelait un peu en écartant les bras, le gonflement de l'étoffe se crevait de place en place, selon les inflexions de son corsage.²³

フローベールは血のバラ色や陶器の白という色彩を完全に消すことで、エンマのドレスの「黄色」を印象付け彼女の存在を視覚的に浮上させている。また、ドレスの裾が広がるのは硬い敷石の上と明記されることから、エンマの身体は地上とだけと結びつき彼女の存在の現実性が強調され、胸にそったドレスの綻びから彼女の肉体の豊満さが全面に押し出されることになる。それによってエンマの身体に特化した魅力に焦点が合わされ、ロドルフがエンマに十分引き付けられた時点でジュスタンの意識はもどるのである。

5. 終わりに

以上のことから、ジュスタンの特徴は2つあると考えられる。ひとつは、彼の媒介性である。他の使用人達と異なり、ジュスタンだけはオマー家とボヴァリー家を自由に行き来する、換言すれば彼は異なった二つの世界を結びつける存在なのであり、そのようなジュスタンの媒介性によってエンマはレオンとの恋愛関係を明確に自覚するし、ロドルフは彼女の身体的な魅力に気付くのである。もうひとつの特徴は、ジュスタンが他者にとって非存在ともいえることである。彼はエンマの死まで彼女に恋をし続けるが、オマーは彼がフェリシテに恋していると誤解するし、エンマもジュスタンの感情に全く気付かず、むしろ彼を冷たい態度で突き放す²⁴。実際、製麻工場の見学の場面でも、ジュスタンは皆にとって下働きの見習いにすぎず、気を失う場面においても、介抱されはするがロドルフにとっては単なる「若い男」、エンマにとっては使用人なだけである。つまり他者にとって存在意義がないゆえにジュスタンは純粋な媒介者としての役割を果たしていると考えられるだろう。しかしジュスタンの役割はそれだけではない。なぜなら彼はエンマの恋愛にかかわるだけでなく彼女の死にも深く関係しているからである。この点については稿を改めて論じたい。

註

- 1 『まごころ』のフェリシテとオーバン夫人は二人とも男性に失望し、同じ病で亡くなる。ドゥブレ＝ジュネットは、フローベールは彼女達の類似を自覚していたと指摘している (voir Rayonde Debray-Genette, « Genèse du récit dans *Un cœur simple* » dans *Métamorphoses du récit*, Paris, Seuil, 1988, pp. 74-75)。また、シジバは『ボヴァリー夫人』のフェリシテは、エンマの死後彼女の服を盗んで男性と逃げることから無秩序の象徴と考えられると指摘している (voir aussi Luce Cziba, *La femme dans les romans de Flaubert : mythe et idéologie*, Lyon, Presses Universitaires de Lyon, 1983, pp. 286-287)。
- 2 エンマの死後ジュスタンは一人彼女の死を悼む。「もみ林の中の墓穴のほとりに、一人の少年がひざまずいて泣いていた。すすり泣きに痛むその胸は月光よりもしめやかに夜よりも計りがたい愛惜にひしがれて、闇の中にあえいでいた」(Gustave Flaubert, *Madame Bovary*, préface et commentaires de Pierre-Louis Rey, Paris, Pocket, 2011, p. 400)。訳出にあたっては『フローベール全集』第1巻(伊吹武彦訳)、筑摩書房、1965年を参照した。
- 3 Voir Claudine Gothot-Mersch, « La description des visages dans *Madame Bovary* », *Littérature*, n° 15, 1974, p. 23. 「彼女[エンマ]は櫛をぬいてさっと頭を振った。髪全体が黒々とした巻き毛をくりのべて、膝まで垂れ下がるのをはじめて見たとき、このあわれな少年ジュスタンは突然、不可思議な新しい世界へと入ったような気がして、そのあでやかさにおびえるのであった」(*Madame Bovary*, op. cit., p.263)。ゴッド＝メルシュは、エンマの黒髪は不吉さを意味し、それゆえにジュスタンは彼女の髪の美しさに惹かれながらもおびえるのだと指摘している。またその不吉さはエンマの死後シャルルの手に握られた一房の彼女の黒髪にも感じられると分析する。

- 4 Voir Marc Girard, *La passion de Charles Bovary*, Imago, 1998, p. 56.
- 5 草稿の引用に関しては、ルーアン大学の *Les manuscrits de Madame Bovary, édition intégrale sur le web*, (<http://www.bovary.fr/>) を参照し、行間や余白の書き込みはイタリック体にした。なお、フォリオの番号や執筆順に関しても同サイトを参照した。また、Gustave Flaubert, *Plans et scénarios de Madame Bovary, présentation, transcription et notes par Yvan Leclerc*, CNRS éditions, 1995 及び Matthew MacNamara, *La textualisation de Madame Bovary*, Éditions Rodopi B. V., Amsterdam-New York, 2003 も参照した。
- 6 Ms gg 223², f^o 91 で « un petit cousin de Mr H »であったジュスタンだが、次の ms gg 223², f^o 90 では « parent éloigné de Mr Homais » となり、ms gg 223², 98v になると « ~~un~~ parent ~~fort~~ éloigné de Mr ~~Homais~~ » や « arrière neveu ~~fort~~ de Mr Homais » と書かれる。最終稿では « un arrière-cousin de M. Homais » (*Madame Bovary*, pp.118-119) に落ち着き、ジュスタンとオメー氏との関係は f^o 91 よりも遠くなりながらも、血縁はある程度保ったままとなる。
- 7 Ms gg 221, f^o 169 では、ジュスタンがボヴァリー家の引っ越しをどのように手伝ったかが記される。« ~~on l'employa pendant quinze jours exclusifs à l'installation du ménage-Bovary. aussi du matin au soir il était continuellement à passer sur la place portant la boîte aux clous ou que autre ustensile car domestique prêté par l'apothicaire qui se montra vraiment~~ le meilleur des voisins ». しかし、その後、ジュスタンがボヴァリー家の引っ越しを手伝う記述は消去される。
- 8 *Madame Bovary*, op. cit., p. 135.
- 9 プランとシナリオ Ms gg 9, f^o 23 でも、« promenade à la fabrique. — Justin - retour - ne va pas chez Homais - seule avec ses pensées. débiter par le monologue » と書かれ、ジュスタンがこの場面で重要な役割を果たしているのがわかる。
- 10 *Madame Bovary*, op. cit., p. 137.
- 11 Voir Pierre-Louis Rey, « Questions de savoir-vivre » dans *Madame Bovary et les saviors*, Presses Sorbonne nouvelle, Paris, 2009, p. 128. エンマはシャルルが「ナイフ couteau」を持っていることで彼を軽蔑するが、実はロドルフもレオンも「ナイフ canaif」を持っている。しかし、ピエール＝ルイ・レイは後者のナイフは « savoir-vivre » のためだという点でエンマの軽蔑を免れていると指摘する。
- 12 *Madame Bovary*, op. cit., pp. 137-138.
- 13 *Ibid.*, pp.165-166.
- 14 Ms gg 9, f^o 206 では、« Bovary commanda donc d'apporter une bande et une cuvette, et pria Justin de le/a soutenir » というように、外科をジュスタンに教えたいというシャルルの好意的な言葉も消される。明らかにシャルルは、ジュスタンをいつも怒鳴りつけることしかしない血縁で雇い主のオメーよりも、ジュスタンに対して親切に接する。二人ともエンマへの愛を貫くが、結局はエンマから常に冷たくあしらわれることからシャルルとジュスタンには共通点が見いだされる。
- 15 *Madame Bovary*, op. cit., p. 166.
- 16 « ~~on l'assaut sur une table le dos appuyé à la muraille~~ » (ms gg 223³, f^o 43).
- 17 « - du vinaigre ! cria-t-il ! ah mon dieu ! deux à la fois comment faire ? » とシャルルが叫ぶのに反してロドルフは « - ce n'est rien » と答えるというように、二人の態度は対照的となっている。ほぼ同様の文章は ms gg 223³, f^o 45, f^o 49, f^o 48, f^o 47, f^o 46 にも見られ、最終稿では次のように書かれる。« - Ma femme ! ma femme ! appela Charles. D'un bond, elle descendit

-
- l'escalier. - Du vinaigre ! cria-t-il. Ah ! mon Dieu, deux à la fois ! Et, dans son émotion, il avait peine à poser la compresse. - Ce n'est rien, disait tout tranquillement M. Boulanger, tandis qu'il prenait Justin entre ses bras. Et il l'assit sur la table, lui appuyant le dos contre la muraille. Et, dans son émotion, il avait peine à poser la compresse. » (*Madame Bovary*, op. cit., pp. 166-167).
- 18 Ms gg 223³, f° 50 では次のように書かれている。「-Emma ~~versa sur son mouchoir~~ bien vite dénoua la cravatte de Justin - mouvement de tête qui balotte - et la rosette qui attachait sa chemise -[...] - elle versa sur son mouchoir du vinaigre, soufflait dessus A, et elle lui en tamponnait les tempes ».
- 19 *Madame Bovary*, op. cit., p. 167.
- 20 ジャン＝ピエール・リシャールは、エンマが最初にロドルフに身をまかせる場面で、液体が生命力と結びついていることを指摘している。Voir Jean-Pierre Richard, *Littérature et sensation : Stendhal et Flaubert*, Paris. Éditions du Seuil, 1954, p. 161.
- 21 *Madame Bovary*, op. cit., p. 202-203.
- 22 『まごころ』の中でテオドールがフェリシテを出会った道で誘惑する場面にも「埃」が漂っている。「les quatre chevaux, en traînant leurs pas, soulevaient de la poussière. Puis, sans commandement, ils tournèrent à droite. Il l'embrassa encore une fois » (Flaubert, *Trois contes*, introduction, notes, chronologie et bibliographie mise à jour par Pierre-Marc de Biasi, Paris Flammarion, 2007, p.46) . エリック＝ル・カルヴェツは『まごころ』で、フェリシテとテオドールが初めて関係を持つ場面の草稿を詳細に分析している (voir Éric Le Calvez, « Le baiser de Félicité » dans *Genèses flaubertiennes*, Éditions Rodopi B. V., Amsterdam-New York, 2009)
- 23 *Madame Bovary*, op. cit., p. 167.
- 24 Voir Sylvie Triaire, « Vanités flaubertiennes : le savoir de la mort » dans *Madame Bovary et les savoirs*, op.cit., p.77. ジュスタンがエンマの墓で夜中に死を悼む姿は崇高な悲壮さを感じさせるものであるにもかかわらず、それを目撃したレチスブードワは彼を野菜泥棒と思いこむことから、トリエールはそこにフローベールのリリースムに対する独特のイロニーを見出している。